

4

ズームからホームへ —心理学者の考察

ネリー・Z・リンバダン

2021年3月、青山和佳先生〔以下、ワカ先生〕から、ミンダナオ出身の研究者でプロジェクトをやってみようと思う、というメールをいただきました。どのように進められ、どのような結果をもたらすのか、まだよくわかりませんでしたが、そのアイデアには、いつもと異なる種類の知的興奮を覚えました。パンデミックから約1年、どんな試みや計画であれ、なんでもオンラインでやり取りする日常から脱け出すには良いし、何かプラスになるはずだと思いました。そこで、私は自分自身に言い聞かせました。やってみよう、と。1ヶ月後にオリエンテーションが行われました。そこで彼女が書いた「他ではできないようなことを一緒にやりましょう!」という言葉で、さらに興味を引かれたのです。

数ヶ月間に渡って行われたセッションや時間を決めての会話を通じて、私はこのプロジェクトの参加者4人をよく知るようになりました。それはまた、ミンダナオに対する私自身の見解、信念、感情を深め、広げることにもつながりました。その結果、私自身も変わったのです。

勇者カルロ

最初の2回のセッションで、参加者たちは、好きなグループ名、つまり自分たちだけの名前、私たちについての名前をつけることになりました。「DEAI」〔綴りは日本語の「出会い」に拠る〕というグループ名を提案してくれたのは、カルロでした。

日本語の「出会い」は、出会うことを意味します。しかし、ビサヤ語の“diay”は、いくつかの意味があります。たとえば、「ところで」という意味があり、情報を与えるときに使います（例文として、“diay, naa koy nabal-an karon lang”, 訳「ところで、私はいま知ったばかりのことがある」）。ほかに、質問で使う場合は、興味を伴う驚きの表現になります（「diay?」, 訳「そうなんですか?」）「プロジェクト」と組み合わせると「project diay」と言うと、プロジェクトはよりカジュアルな響きになり、まるで関係者が楽しんでいて、正式な事業に関わっていることを忘れてしまうかのようなニュアンスになります（“project diay ni no?”, 訳「やっ

ぱりこれはプロジェクトなんだ?」)。プロジェクトが自由でオープンな出会いの場所となり、プロジェクトであることを良い意味で忘れるようになることを願って、“diay [日本語では、DEAI]”と名づけました。

カルロは、積極的に発言し、オープンに、そして正直に自分の考えを伝えることで、グループを鼓舞してくれました。彼は、自分の内なる使命に従うことがいかに大切かを、自らの例で示したのです。彼は、さまざまな場所に行き、その美しさを目にし、その多様性を評価しながらも、故郷キダパワンとつながっていたという思いを失うことはありませんでした。彼の「地元<ローカル>を研究することを通じてルーツに再びつながる」という作品¹は、人が何百キロも離れた場所に運ばれても、故郷について書くこと、故郷にいることへの憧れを見出すことができるという、異なる視点を私に与えてくれました。

プロジェクト開始から13ヵ月後のいま、その作品を書くことが癒しになっているとカルロは語っています。

変化するクリスティン

クリスティンに出会ったのは、2021年3月に開催されたアテネオ・デ・ダバオ大学教養学部主催の年次学術集会、第5回アテネオ大学院研究・イノベーション会議（AGRIC）の時でした。彼女はそこで、人類学専攻の大学院生として発表したのです。私の役割は、AGRICの技術委員会の一員として、提出された論文を審査することでした。そのうちのひとつが彼女の論文で、「生活を構築する—ザビエル・エコビルの移住者における災害後のアイデンティティの形成」という題でした。これは、2011年にカガヤン・デ・オロ市を襲った台風「ワシ」の後、バランガイ・カルメンのゾーン7という地区からバランガイ・ルンビアにあるザビエル・エコビルという地区に再定住した家族のアイデンティティ形成に支援が与えた影響を科学的に検証しようとするものでした。受給者が状況をコントロールするほど定住が進むというのが、彼女の結論でした。

彼女の導き出したコントロールとパワーに関する結論は、物事の核心を衝いています。本プロジェクトを通じてグループセッションと個人セッションの両方でクリスティンの話を聞いてきましたが、彼女は常に進化を続け、彼女の語りも変化していきました。変化が、個人的なものから組織的なものまで、小さなものから大きなものまで、さまざまであったことも特筆すべき点です。彼女の自伝的作品「研究者の背後に」に書かれているように、彼女の旅は困難なものでした。ク

1 本ブックレット収録。

リスティンは、逆境の中でのレジリエンスを体現していました。

私にとって彼女は「美しい驚き」と呼ぶにふさわしい人でした。

鋭いクリスチャン

クリスチャンと私は〔アテネオ・デ・ダバオ大学の〕社会科学クラスターの同僚です。私は彼がさまざまなトピック、とくに数字や数値に関わるものに対して、率直で厳しい意見を言うことを知っています。経済学者によく見られるように、彼はささいなことでも熱く語ることがあります。統計分析をしていて、数値が急激に増減していると見過ごすことができず、寝不足になってもその原因を突き止め、何がその差異を生じさせたのか特定するような人です。クリスチャンは実に鋭いのです。

興味深いことに、彼はこのプロジェクトのおかげで、統計の枠を超えて物事を見ることができるようになりました。このプロジェクトを通じて私がそばで聞き、また見てきたことは、貧困という社会的な問題に関心を持ったことで彼がより人間らしくなったということです。本人の言葉を借りれば、彼は人びとに寄り添い、人びとの考えを聞き、人びとの感情を感じ取りたいのです。そこにあるのは、絶対的な尺度ではとらえきれないこともあるという無限の可能性に自らを開く、ひとりの研究者の姿でした。この世界には、経験を積み文脈を理解すれば説明が可能になる出来事があるのだということを、科学的に認識するしかないと感じたのです。

クリスチャンはディテールにこだわる人ですが、このプロジェクトを通じてそれを超越し、その先を感性で見据えることができると明らかにしてくれました。まさに「数字から言葉へ」²向かう、その先を見据える感情的な能力がある人であるということでした。

トレイルブレイザー

道標をつける人、ワカ

2019年初めの海外指導者育成プログラムから帰国したばかりの私に、アテネオ・デ・ダバオ大学を拠点とするイエズス会の人類学者ユリセス・カバヤオ神父が、日本人研究者と一緒に研究室に訪問したいと連絡してきました。2014年に学会で名古屋大学を訪れたときの印象と驚きがまだ残っていたので、その研究者と会うことを楽しみにしていました。こうして実現した2016年5月の〔青山との〕初対面の後に続いたのは、私が「社会科学講演会2019」と名づけた一連の講演会でし

2 本ブックレットに収録。

た [青山が初回発表者として登壇]。この人はただの学者ではありませんでした。ワカ先生の携えていた著作は印象的でしたし、豊富な業績や発表にも触れました。しかし、それ以上に印象的だったのは、1997年から一緒に過ごしてきたサマ・バジャウの人びとへの献身と、愛情を重んじる人柄でした。彼女はサマ・バジャウの人びとにとって単なる研究者ではなく、今に至るまで友人であり続けています。[サマ・バジャウの子どもたち] 一緒に食事に行ったとき、彼女が「ハロハロ（豆、果物、エバミルクをかけたかき氷、アイスクリームなどからなる冷たいデザート）を食べましょう」とささやいたのをよく覚えています。相手が何を欲しているかを正確に知っているというのは、親密な証です。彼女がサマの人びとをアテネオ・デ・ダバオ大学に招いてくれたおかげで、私もサマの人びとと出会うことができました。

ワカ先生の傑出したところは、ダバオ市のサマ・バジャウの人びとについて書き続けているところです。書かれたものがなければ、読むべきものも存在しません。明文化されていないものは、記憶にも残らないのです。ワカ先生は、若い研究者たちに彼女が歩んできた道を考えてもらうために、道を切り拓いているのです。彼女は、若い世代がより理解できるように、サマ・バジャウの人びとの物語を集め、書いています。

ワカ先生が道を照らしてくれるから、みんなに道が見えるのです。

では、わたし自身はどうでしょうか？

ネリー・ザ・オブザーバー ああ、観察者としてのネリー

このプロジェクトに参加するための条件が提示されたとき、私は直感的に最初のプロジェクト名である“Cultivating a Place Together”をもとに決めました。体験型、エスノグラフィーのようで、わかりやすかったからです。ミンダナオの若い研究者たちがどんな人たちなのかは、Zoomで打ち合わせをしたときに初めて知りました。それから数ヶ月、カルロ、クリスティン、クリスチャン、そしてワカ先生が、月に一度は必ず会う仲間になりました。彼・彼女らは幸せな仲間でした。私たちはよく笑いました。彼・彼女らは心から経験や気持ちを分かち合いました。信頼関係があったからこそ、個人的な情報も開示できたのです。そこには、互いの人生に対する真の関心と配慮^{ケア}がありました。

このプロジェクトが始まって11ヶ月目に、母が亡くなりました。すべての死がそうであるように、それは辛いことです。愛する人がいなくなると、何とも言えない虚無感に襲われます。しかし、カルロ、クリスティン、クリスチャン、そ

してワカ先生と築いたこのホームは、地理的には離れていても、個人的には手が届くという、稀有な避難所になりました。このプロジェクトにおける私の第一の役割は、参加者たちに心理的に安全な環境を提供することでしたが、その前にまず人間であるということを彼・彼女らは教えてくれました。事前に約束していたセッションのいくつかを延期して、しばらくの間、私を独りにしてくれたのです。これこそがホームというものなのではないでしょうか。自分が自分であることを許してくれる場所。そして、状況が良くなったら、立ち上がって、またゆっくりと世界と向き合っていく。観察者であることの難しさは、自分の経験したことが、他者や世界の上に起こっているのと同じときです。ただその状況に身を置き、それを感じながら、戦わないというのは、謙虚さと勇気が要ることです。手を放し、ただその瞬間に身を任せるのです。

〔このプロジェクトに参加した〕作家、開発従事者、経済学者、心理学者、人類学者の背後には、感じ、聞き、見て、苛立ち、失望し、傷つき、壊れていく人間がいるのです。そして、最も重要なことは、耕したいものを抱えていながら、そのための時間と空間が足りないだけという人もいます。耕cultivateしたいものを抱えていながら、そのための時間と空間が足りないだけの人もいますということです。

(訳：青山和佳)